

2018年度入学式式辞



皆さん、学部・大学院・特別専攻科へのご入学おめでとうございます。ご来賓の本学後援会の原会長並びに副会長の皆様、および列席の本学理事・副学長、学部長・研究科長とともに心からお祝いしたいと思います。

今年度は、学部として、教育学部 168 名、経済学部 324 名、システム工学部 320 名、観光学部 126 名、全学で 3 年次編入生 30 名が入学されました。大学院として、教育学研究科修士課程 50 名、経済学研究科修士課程 24 名、システム工学研究科博士前期課程 138 名、博士後期課程 9 名、観光学研究科博士前期課程 7 名、博士後期課程 6 名、特別専攻科として、特別支援教育特別専攻科 8 名が入学されました。

皆さん、難関の入学試験をパスされ、晴れ晴れとした気持ちで入学されたことでしょう。また、これまで皆さんを支えてこられたご参列のご家族の皆様も、安堵と期待（の気持ち）であふれていらっしゃると思います。皆さんの気持ちに答えられますよう、和歌山大学は、より学びやすい教育環境を提供して参ります。

和歌山大学は、4つの学部で構成される総合大学です。総合大学の強みは、多種多様な分野の教育を受けられること、様々な進路を目指す学生が集うキャンパスであることです。

教育学部は、140 年以上の歴史をもち、和歌山県をはじめ全国の小中高校に多くの教諭を輩出しています。教員養成課程で学ぶ皆さんは、将来の日本を背負うべく生徒を導く教員を目指してください。経済学部は、90 年以上の歴史を持ち、卒業生の多くは、経済人、産業人、公務員等として活躍しています。皆さんも、情報化が進む金融・経済・経営で力が発揮できるようしっかり学んで頂きたいと思います。システム工学部は、比較的新しい学部ですが、20 年を超える歴史を持ち、諸先輩は、産業界の中心的なエンジニアとして活躍していま

す。皆さんも、世界トップレベルの科学技術で日本の産業を牽引すべく技術者、研究者を目指して勉学に励んでください。観光学部は、一番新しい学部で、昨年10周年を迎えました。学際的な教育で、地域で活躍する人材、国際的に活躍する人材を育成しています。将来、世界を視野に多方面にわたる分野で活躍できるように頑張ってください。

大学では、講義での学びだけでなく、自らいろいろな学問分野に興味と探究心を持ち、能動的な学びで自分自身を成長させることが大切です。自然科学や社会的な事柄に、疑問を持ち、深く学んでください。社会の問題の多くは、1つの分野の知識では解決できません。専門知識を深く学ぶことに加えて、幅広い分野の知見を活かすためにも、教養教育で知識の幅を広げてください。

和歌山大学クロスカル教育機構には、「教養の森」という教養教育の運営組織を設置しています。教養の森では、講義だけでなく、教養の森ゼミナールなど、教員と学生が一体となり学ぶ仕組みも備えています。また、和歌山について知り、和歌山で活躍する意義を見出す「わかやま未来学副専攻」も設置しています。更に昨年からは、関西棋院と連携し、「囲碁から広がる教養の世界」を開講しています。皆さんの論理的な思考力や深く考える能力の向上につながることを期待した講義です。



皆さんの身の回りには、スマートフォンに代表されるシステム化された情報機器があふれています。社会では、あらゆる仕事で情報システムを使いこなす素養が必要とされています。情報システムを使いこなすには、データに基づいた分析や意思決定ができる人材が必要です。今後の社会では、人文系を問わず、数理・情報の知識について積極的に学んで頂きたいと思います。

大学では、先人の知識を学ぶだけでなく、自ら新たな知識を創造することが重要です。大学で学び研究するということは、未知なるものを探求して新しい事象や知識を発見すること、また、様々な情報から普遍的な規則を創造することです。学びと研究を通じて、社会の発展、進化に貢献することができます。

また、情報技術や人工知能により、社会システムが大きく変わろうとしています。将来、現在ある多くの職業が人工知能に置き換わると言われています。変わりゆく社会に対応できる柔軟な思考力と未知の課題に対応できる問題解決

力を伸ばしてもらいたいと思います。情報の少ない未知の課題への対応は、人工知能も不得意です。未知の領域や未開拓の分野に挑戦する力で来るべき世界において人の存在感を示していきましょう。

和歌山大学は、皆さんが将来の夢を実現するための学びの場です。大いなる志をもってしっかり学び、自信をもって社会に飛び立てるよう大きく成長されることを期待いたします。充実した大学生活が送れますように、初心を忘れず頑張ってくださいと思います。

心からの祝福と期待をもって、ご入学の歓迎の挨拶といたします。

2018年4月5日
和歌山大学長 瀧 寛和

